

インモースに見る日本・能・融合
Japan, Noh, and Fusion in Immoos's Writings

宮崎 雅生

MIYAZAKI Masao

This summer I had the valuable experience of encountering a book *Kawarazaru-Minzoku* written by Thomas Immoos(1918-2001), in which we can see the image of Japan and the Westerners' view of the East. Thomas Immoos shows in his writings great and marvelous insight based on the knowledge of Jung's analytical psychology with which he successfully elucidates Japanese culture and gets us Japanese to recognize the fusion of the West and the East, until we can facilitate our comprehending of Noh through the concepts of collective unconsciousness and archetypes. Seeing changing Japan, Thomas Immoos is convinced of its eternity, which he suggests can be realized by Noh in the most spiritual form with its hidden beauty.

1. はじめに

この夏、非常に貴重な出会いがあった。それは一冊の本 『変わらざる民族』 との出会いである。これは、著者にとっては外国たる日本というものをこの上ない洞察力をもって論じた名著である。「融合文化論」を語るとき、今の私にとってはその著者たるトーマス・インモース(Thomas Immoos, 1918-2001)を抜きには考えられない。本小論においては彼の著作・対談・講演を軸に日本文化と他国のそれとの融合、そして特に能について言及していきたい。

2. 日本文化の形と西洋人の東方観

インモースは著書『変わらざる民族』の冒頭部分で「この国の本当の魅力は、むしろ東洋と西洋との特異な共存にあるのではないだろうか」⁽¹⁾、また「今日の世界において日本がきわめてユニークな文化をもっているのは、多種多様な要素を融合同化させた結果である」⁽²⁾とも言っている。確かに我々日本人は西洋への憧れをもって明治維新以降突き進んできた。軍隊、教育、音楽、演劇等々。日本人はそうやって独自の宝をおさなりにしつつも文化は古来独特のものであることを心底望む。インモースの言う共存・融合の言葉に全面的に賛同するのをよしとしない日本人も少なくないのではないだろうか。しかし、この本を精読すればそういった人々の心の霞も消え失せることであろう。

インモースは、「日本人の行動と感情のもととなる価値体系は日本人独特である」⁽³⁾、また「一億の人間が単一的に組織され、単一のモチベーションと単一の教育にもとづいて活動している。それが世界に独特のダイナミズムを生んでいるのである。」⁽⁴⁾とも言っている。単一的にとまでは言い切れないまでも、これは良い意味での「非個人主義社会」の賜物であろう。さらに、「日本人の心には超近代的なものと太古のものとが混在している」⁽⁵⁾とも言っており、戦後間もない頃から日本の地方の姿から見知っている彼は、そこにははっきりと日本人の力強さと文化融合の素地を見て取ったのである。

インモースはスイスのバロック演劇に多数の日本をテーマとしたものが現れていたことも紹介している。そこでは多くのキリシタン大名が登場したが、中でも「豊後物語群」として一括されるものでの主たる登場人物は大友宗麟である。

イエズス会の劇作家が、およそ尋常にはほど遠い宗麟の生涯のどの面に重点をおいているのか、いまのところわれわれにはわからないが、それが身分の高いキリシタンの中でも際立ったひとつの例を示すとともに、バロック作家好みの、運命の小車の思わざる変転というテーマを描くのに恰好の材料となったことはたしかである。⁽⁶⁾

宗麟はお家騒動の中で相続し、教会を建て、ユートピアまで作ろうとした人物であり、六ヶ国あった領国も島津との戦い後秀吉に一ヶ国とされ思いを残して死んでゆく。このダイナミックに生き抜いたキリシタン大名に興味関心が集まったことは納得がいく。そして三百年も前にこの遙か東の奥のそのまた奥のこの国が奇異の目をもってではなく、賞賛の

目をもって西洋に少なからず知られていたことは驚きであり喜びでもある。

3. 能 死と再生・深層心理

インモースの著作を通じて、能が彼だけに魅力を示したのではなく、他の外国人たちにも賞賛の目をもって評価されていることを知った。この夏まで一度も観能経験も知識もなかった私にとっては冷水を浴びされたような思いであった。インモースは講演の中でこう語っている。

いま、日本にきて能を学んでいるドイツの俳優は、私に「能は、世界の演劇の発展のためにすばらしく役立つものなのですから、能のことを日本人だけにまかせておけないと思います」と言いました。彼は、それほどの認識と意気込みをもって、能に取り組んでいるのです。(7)

ここまで外国人をして言わしめるものはいったい何なのだろうか。三冊の本を読んでいくと西洋人がなぜ能に魅かれるのか、インモースの鋭い考察から分かってくる。

インモースは、加藤恭子氏との対談の中で、「たとえば能ですが、はじめて見たときは、“deja vu” という感じでした」(8)と語っている。さらにこう続く。

私個人の記憶というよりも、人間としての過去の記憶の中で。日本という土地の上で、私は少しずつスイスの過去に出会うようになった。バラバラだったものが一つまとまり、私は自分自身の過去に出会うようになった。自分というものを理解するようになりました。(9)

また講演の中で、さらに対談においてこうも言っている。

能を観ていても世阿弥のものは、“どこかで見たことがあるぞ”ということをおぼろげに思わせるくらい、そこからは無意識の世界からもたらされる英知を感じることができるのです。(10)

ヨーロッパの観客にはどこか魅かれるものがある。そしてそれがなぜかを知るためには、太古の元型的現象を思い出す以外にない。(11)

インモースは、ここにユングのいう「普遍的無意識」の世界を見るのである。この深層心理の世界の理解が不可欠であるとしている。『変わらざる民族』の最終部分で、「それを予感できるならば、東と西の観客は東西に共通する運命の種々相をそれらの原型において解明できるだろう」と言っている。

インモースは人類の“共通体験”の例として、岩手県大迫町大償神社の権現舞を挙げている。この子供の健康を祈っての「胎内くぐり」も「死と再生」に関わるものだと論じる。この「死と再生」がテーマとなると『谷行』ということになる。

少年は上に石をかぶせられて、いったん象徴的な死をとげるけれども、その後で完全な人間としてよみがえり、新しい生命をはじめます。(12)

水、森、山、狭間、洞窟は、女性的なもの、または「無意識」の原型的象徴なのです。峰入りする行者は母胎へ回帰し、そこでより高い存在に再生しようとします。(13)

上記二つの引用からも窺い知るインモースの能に対する理解の上に深い分析心理学の知識と応用力をもって説明しうるこの能力の高さには驚かされる。彼の見識の高さを示す箇所は枚挙に暇がない。

インモースは『変わらざる民族』の中で、ウェイリーの『谷行』英訳における切能の存在理由たる鬼神の顕現と少年の蘇生の場の削除による合理性を否定し、また彼が二十世紀のドイツ劇壇最高の演劇人と評価するブレヒトの翻案の過程を述べているが、そこに真の日本文化理解者としての目とともに「日本人」とでも称したいほどの我々日本人の尊敬と憧憬を抱かせるものを感じる。

去る7月10日に横浜能楽堂で『谷行』が上演された。この能は上演機会が少ないという。それはシテの活躍する場がほとんどないがゆえに演目選ばれにくいためだとインモースも述べているが、観世流能楽師・杉澤陽子氏によると大勢のワキを揃えるのが困難ゆえだともいう。その貴重な機会を逃がしてしまった。残念至極である。二ヶ月前には山伏の大

法も何も知らなかった。『変わらざる民族』を初めて読んだときは取り立てて魅かれもしなかった。しかし今、谷行の二文字を見る時、その感情が以前と異なるのがはっきりわかる。

4. 『井筒』に見る両性補完・幽玄

八月に『井筒』を見た。インモースと同様の「慄え」を期待して。予習のため図書館で借りた謡曲集の最初の備考欄にはこう書かれてあった。

女性が男装し、自分自身にも、それが女としての自分であるか、恋する男なのかわからなくなってくるといった形で、恋する者の一体化への希求をみごとに表現している。(14)

謡曲集のこの三行の文言を見ただけでも興味をそそられた。ここからもわかる通り、『井筒』は、ユングの言うアニマとアニムスをモチーフにした成功例である。インモースはこれに関連して著書・対談で以下のように述べている。

劇の頂点において女が恋人の衣と冠をつける。つまり能は太古からの人類の叡智によって、自分と反対の原理を自分のものにすることによって人格を完成させるという奥義を知っていたのではないかということである。(15)

男性のアニムスが、彼にそなわるあらゆる可能性を完全に発揮するために彼がなすべき後半生の最大の課題はアニマの補完であると、ユングが言った。このユングの理論が能において実証されているのである。(16)

また、対談の中で興味深いことも述べている。

私たちは相手の女性を愛していると思っけていても、実はその女性に投影された自分の「アニマ」を愛しているのかもしれないのです。(17)

そして、これに関連し、能面について加藤恭子氏との短いやりとりの中にその神人合一

の具たる所以を理解できる。

加藤 : その瞬間に、女を演ずる男性は性を越え、別なものと合体するのでしょうか。

インモース : その変化合一によって、遠い過去が呼び出され、超自然が現出し、原人間への回帰がなされるのです。

加藤 : “原人間”とは？

インモース : 人類の「元型」。半陰陽性、雌雄の一体性です。面は人間に個体の限界を超えさせ、ふつうだったら不可能な“全体”への帰一を可能にするのです。(18)

私が最も能を感じるのは数多くの種類の能面の中でも『井筒』のシテ、後シテも使用する「若女」の類である。「無意識」の世界たる鏡の間で降神した演者が橋掛を通して「意識」の世界たる舞台に立つとき、面はすでに物理的に存在するものではない。神の顕現を実現するための恐ろしいほどの内的エネルギーをもった形而上学的媒介物なのである。

『井筒』では勿論後シテの序の舞以降がクライマックスであるが、私が美を感じるのはシテの唐織である。前を合わせ、裾が心持上った、このシンメトリーではないがゆえの美しさがある。それが能面を伴い幽玄の中でより一層その輝きを増す。

5 . 終わりに

『変わらざる民族』は日本・日本文化、そしてとりわけ能についての理解を深めさせてくれた。しかし、この名著が現在絶版状態にあるという。是非再版を望むものである。インモースは言う。

急速に変化しつつある現代においても、「永遠の日本」がなくなることはないだろうという確信を植えつけているのである。(19)

この「永遠の日本」を実現するものが、世界の文化融合の一つたる能であろう。能についての理解は、インモースを楽山大仏とすればまだ私はその足の小指にも乗れない人間の

如き小さい存在であるが、インモースも対談の中で言うように、私も時間をかけ探っていく「勉学」⁽²⁰⁾を試み、今後も自分なりの研究を積んでいきたい。このような価値ある研究の機会を与えてくれたインモース氏に改めて謝意を表したい思いである。

註

- (1) トーマス・インモース著、尾崎賢治編訳『変わらざる民族』南窓社、1972年、pp.12-13
- (2) 同上、p.22
- (3) 同上、p.24
- (4) 同上、p.25
- (5) 同上、p.26
- (6) 同上、pp.66-67
- (7) 新書編集委員会編『人間と文化』三愛会、1980年、p.113
- (8) トマス・インモース、加藤恭子著『深い泉の国「日本」』中央公論新社、1999年、p.45
- (9) 同上、p.45
- (10) 前出『人間と文化』、p.137
- (11) 前出『深い泉の国「日本」』、p.128
- (12) 前出『深い泉の国「日本」』、p.62
- (13) 前出『深い泉の国「日本」』、p.63
- (14) 日本古典文学全集 33 『謡曲集一』小学館、1973年、p.271
- (15) 前出『変わらざる民族』、p.186
- (16) 前出『変わらざる民族』、p.186
- (17) 前出『深い泉の国「日本」』、p.65
- (18) 前出『深い泉の国「日本」』、p.119
- (19) 前出『変わらざる民族』、p.26
- (20) 前出『深い泉の国「日本」』、p.77

参考文献

- トーマス・インモース著、尾崎賢治編訳『変わらざる民族』南窓社、1972年
トマス・インモース、加藤恭子著『深い泉の国「日本」』中央公論新社、1999年
新書編集委員会編『人間と文化』三愛会、1980年
日本古典文学全集 33『謡曲集一』小学館、1973年
小林保治・森田拾史郎編『能・狂言図典』小学館、1999年